〈原著論文〉

授業記録作成における付加情報の範囲
―富山市立堀川小学校『授業の研究』の事例分析―

的場正美 *

1．本研究の課題と目的

1-1　本研究の対象

日本における授業研究は、明治期の実地授業の批評以来の長い歴史がある。現代における授業研究は、「一般的には教師が授業改善、実践的な力量形成および学校文化の構築のために協働しておこなう研究授業の立案、実施、観察、協議、評価、そして改善という一連の教師による研究およびその基礎研究」（的場　2013b，290）と定義づけることができる。いっぽう、戦後に重松鷹泰が始めた授業分析は、「授業研究の一手法であり、教育実践の事実、すなわち授業における教師と児童生徒の発言、活動、その他、授業を構成している諸現象を、できるだけ詳細に観察・記録し、その記録に基づいて授業を構成している諸要因の関連、学習者の思考過程、あるいは教師の意思決定など授業の諸現象の背後にある規則や意味を、実証科学的、社会科学的にあるいは解釈学的など多様な方法によって明らかにしようとする。」（的場　2013a，6-7：的場　2002）と性格づけることができる。授業分析は、授業逐語記録とよばれる授業の詳細な記録を基礎資料とする。授業逐語記録は、現象である授業実践を観察、録画し、音声記録や映像録画を文字記録に直して、それに発言番号などを付加して作成される。その過程は、情報の変換過程でもある。この情報がどのように変換されるか、次の３つの水準を設定できる。

第１水準：授業過程の録画（録画と音声）
第２水準：音声記録から文字記録（転記情報、①話者交代、②文章の区切りとしての句読点）
第３水準：作成された文字記録を基礎にして、どのような内容が、どの形式で、付加されるか。

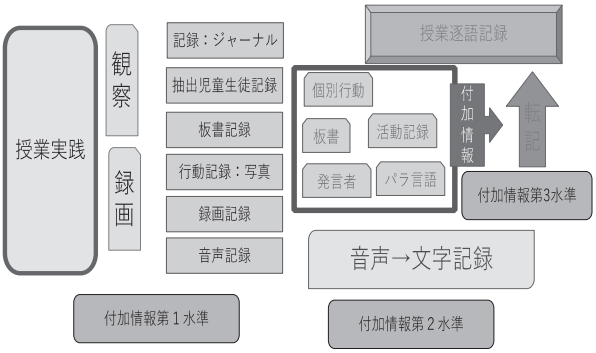


図１　付加情報の水準

授業を観察するとき、どの場所から観察するのか、一台のビデオカメラで録画するときにどの方向から撮るのかという論議は第１水準に関連する。音声録音をもとに文字記録を作成する場合やあるいはその場での速記録をとる場合に、作成者はどのように判断して、文章の区切りの句読点をいれるのか、つまり、第２水準では声データをもとに文字記録として転記する場合にどのような情報を付加するかという問題がある。第３水準の授業逐語記録の作成の形式は日本と諸外国とは異なっている。重松鷹泰を中心とする研究集団において授業逐語記録を基礎に分析をする場合、授業の進行過程をいくつかのまとまりに区分した分節わけがなされる。その分節に題名がつけられ、内容の要約が記述される。どのように分節化されるか、その分節はどのような機能と意味を有するかが問われる。本研究は、授業記録を作成する第３水準における発話者・発言者の付加、発言番号の付加など付加情報を分析の対象とする。

* 東海学園大学教育学部

1-2　本研究の目的

授業分析の基礎資料となる授業記録に一定の形式性をもたせたのは重松鷹泰である。重松鷹泰は、自らの授業研究を授業分析として命名し、最初に著した授業分析の体系的な著書は『授業分析の方法』（重松　1961）である。その後、名古屋大学教育学部の教育方法講座の共同研究として、小中学校の実際の授業記録をもとに授業を分析した『授業分析の理論と実際』（重松　1964）を公刊している。この間に、重松鷹泰は、奈良女子大学付属小学校や富山市立堀川小学校（以下　堀川小学校）をはじめ多くの学校の授業研究を指導している。本研究は、1961 年に公刊された『授業分析の方法』前後に重松鷹泰が指導を行った堀川小学校の授業研究を資料として、授業記録作成における付加情報の範囲を明らかにすることを目的としている。

2．研究方法とデータ

2-1　アプローチと研究方法

分析対象へのアプローチと研究方法は、資料の収集範囲と論議の視点に影響を与える。堀川小学校の授業研究への教育実践史のアプローチの場合には、堀川小学校の戦前から現代までの実践の歴史とその時代の教育実践史を視野に入れる必要がある。それに加え、堀川小学校の実践研究を指導している各研究部の実践家や大学の研究者の助言や支援など教育実践の組織的な解明が必要である。

堀川小学校は、社会科の初志をつらぬく会（以下、初志の会）や学習研究連盟とも関連がある。教育実践史を限定した教育実践のアプローチの場合には、堀川小学校が関連を有した研究団体の展開とその思想を視野に入れる必要がある。

堀川小学校に直接に関わった重松鷹泰と上田薫との関連で教育思想史からアプローチする場合には、重松鷹泰と上田薫の教育思想の解釈と分析の成果を視野に入れる必要がある。上田薫の思想は、小川正によって森昭との相違など教育哲学的側面の解明や位置づけがなされ（小川　1988）、大野僚によって再解釈が試みられている（大野　2010）。重松鷹泰の思想については、奈良高等女子師範学校の木下竹次の学習法と重松鷹泰の関連（蜂須賀　2009）、教育論（田村　2012）、授業分析の意味を重松鷹泰の歩みに即して明らかにした溜池善裕（2014）の研究、R.R. 方式と授業分析に関する研究（柴田，石原　2020）等の研究がある。重松鷹泰の思想に迫るためには教育思想からのアプローチが必要である。どのようなアプローチをとるかによって資料収集の範囲が異なる。本研究は、全体的（ホール）アプローチを心がけ、そのアプローチによって収集された文献や史料を分析する方法としては、論争相手や書き手の立場を考慮に入れた文献批判の方法をとる。

2-2　データ

本研究の分析対象とする主なデータは、堀川小学校が重松鷹泰の指導のもとで授業研究をし、その成果をまとめた『授業の研究』（1959）に記載されている授業記録を主要な分析データとする。その後も堀川小学校は、重松鷹泰の指導のもとで『授業の改造』（1962）を出版している。またそれと前後して重松鷹泰は著書『授業分析の方法』（1961）を公刊している。両方に授業記録があり、1959 年の堀川小学校の著著と密接に関連している。これらの著書の授業記録も参考の分析データとする。

3．堀川小学校の授業研究

3-1　堀川小学校における初期の授業研究

富山市立堀川小学校の当時の校長であった高川義治は、次のように述べている（富山市立堀川小学校 1959, 3）。

「ひとりひとりの子どもの考えには、それぞれに根拠がある。どんなにつまらない発言の中にも、その子どもの過去の学習経験や生活経験が織り込まれているのであって、どの子もどの子も、それぞれに、その子なりに独自な考え方の背景を背負って、個性的に問題に対決しているのである。学習指導は、まず、このような、子どもの考え方の特質も認め、その言い分をすなおにききいれることからはじめなければならない」

そして、重松鷹泰との関係を「たまたま、わたくしたちの研究の進め方が、名古屋大学で重松鷹泰先生を中心に進めていられる研究方法とよく似ていることを知って、重松先生の教えを仰ぐことになったのであります」（同，4）と述べている。

堀川小学校は、1873（明治6）年開校以来、長い歴史がある。大正4（1915）年4月に富山師範学校附属小学校代用に指定され、授業研究がなされたといわれる。師範学校女子部が女子師範学校として新設されたのは大正6（1917）年4月であるが、「同年11月には、県下初の試みとして、公開授業を中心とする研究会が開かれている」（関口　2011，77）。戦後はコア・カリキュラム運動の一環として『堀川教育計画』が実践･公開されていている（関口　2011, 80：富山市立堀川小学校　1959, 264）。その後､「子どもの実態に立つ学習指導」､「子どもの見方・考え方・感じ方を育てる学習指導」の研究主題のもとに実践をすすめてきていた（富山市立堀川小学校　1959，264）。

重松鷹泰の指導のもとで授業分析の研究が始まるのは、1955（昭和30）年度からである。1955（昭和30）年度は5月に算数、社会、体育、の教科、6月に生活、10月に国語、算数、図工、11月に体育、理科、音楽、12月に家庭、社会、1956年1月に算数、2月に国語、家庭、音楽、算数、体育、理科、そして3月に図工の授業の参観・観察がなされている（同，265）。

堀川小学校の授業実践の指導には、重松鷹泰だけでなく、上田薫、そして八田昭平が加わっている。堀川小学校が1962年に公刊した『授業の改造』の序を重松鷹泰が執筆している。堀川小学校の当時の高川義治校長は、最初の著書では重松鷹泰と上田薫に、1962年の著書には、先の2人に加え、八田昭平に謝辞を述べている。

高橋純一・坂井誠亮の研究（2020）は堀川小学校における授業研究の展開過程を詳細にしかも歴史的に解明したものである。公刊された堀川小学校の著書の発刊年を基に黎明期(1959, 1962)､創造期(1966, 1968，1973，1978，1984)、充実期（1994，2000，2006，2009)、発展期（2015，2018）4つの時期に歴史区分されている（同，123)。この区分に従うと本研究が対象とする堀川小学校の授業記録は黎明期の研究である。高橋純一・坂井誠亮は、黎明期における授業研究の特徴を、1)「思考」のキーワードが頻出することを根拠に、学校として子どもの思考をとらえることを重視した、2）子ども中心の堀川小学校における授業研究の端緒であり、重松鷹泰の指導を仰いだ初期の時期、3)「節で分かる」授業分析の手法が位置づけられて間もない頃、としてとらえている（同，122-123)。

3-2　堀川小学校の授業研究の立場

堀川小学校は、最初に学校現場における諸問題を反省する記述から始めている。例えば、一日の指導を振り返り、「きょうはほんとうに気持ちのよい指導ができた」と教師が心から満足することは少ない。しかし、満たされないのは、教師だけでなく、子どもたちもまた満たされていないままに、日々の課業に追い回されているのではないかと反省している。この事態の背後にあるいちばん大きな原因は、「教師の指導意識と子どもの学習要求との間にズレがあるのでは」（同，11）と捉え、「まことの教育は、真に子どもの求めるもの、求めさすべきものを、子どもの立場にたって、そこからはじめることによってはじめて達成できるのではないだろうか」（同，11-12）と予測している。

次に､「ひとりひとりの子どもが積極的に学習に参加してるか」､「生きてはたらく学力となっているか」と問い、「子どもからの問題を出発点とすること」､「子どもの見方・考え方・感じ方の指導」の追究が

必要であるという問題意識を投げかけている。

堀川小学校は、授業研究の進め方について次の３観点を挙げている（同，13-14）。

1）科学性：子どもの個々の思考の発展の経路を着実に観察し、そのデータに基づいて実証的に検討をする。

2）借りものの教育理論にしばられない。子どもから学ぶ謙虚さと自主的な研究のねばりづよさ。

3）研究の協同体制：研究はひとりやふたりの力で完成されるものではない、時間的にも、先人の業績の上にさらに累積されねばならない。

以上の現場の悩みと研究の実情にたって、次のように目指す人間像を示している（同，14）。

「自らの頭で判断し、自らの考えで行動し、自らのその責任の主体となり、かつ世の多くの人々と協力して自己の能力を十二分に発揮できるような、協力的でかつ個性の豊かな自主的な人格」

堀川小学校が研究する態度としては、「客観的・実証的な研究態度」を、方法としては「子どもの思考を追跡すること」を求め、思考の転換や変容のおこったことは何に基因しているかを解釈研究する研究方法をとっている。それを通して、指導の改善がなされる。

3-3　堀川小学校の授業研究の進め方

堀川小学校の授業研究の進め方は、1）事前研究、2）観察授業、3）観察記録の整理、4）解釈研究、5）問題点の整理である。

授業記録の作成に大きくかかわるのは、1）事前研究における観察方法の選択および記録法の決定である。実際に示されている授業は、４年理科「テレビ塔のあかり」である。この単元の研究授業では、乾電池２個をつかって回路構成をし、あかるくつく電流の回路を子どもは、考え、追究している。この授業案の授業展開の諸段階で観察の観点が検討されている。例えば、第２段階の配線図の吟味の段階では、友達の配線図を見て、明るくつくかどうか話し合うことになっている。そこでの観察の観点と観察の仕方は、例えば「基礎回路をどのようにふまえて話し合いに参加しているか」の記録は行動記録の方法でなされる。「直並列のつなぎ方は、どのような根拠で考えているか」の記録は発言記録の観察の方法でなされることになっている（同，24）。

観察方法としては、次のことが検討されている。観察者の位置、観察記録のとり方、私語の禁止、グループの配置、時計係の位置。また、観察の際に、子どもの情緒を安定させるためにどう配慮するかも検討されている。

録音係、写真係などの観察者の作業分担と、記録の方法が検討された。

以上のようにして収集された記録は整理される。授業研究の進め方の、1）事前研究、2）観察授業、3）観察記録の整理、4）解釈研究、5）問題点の整理における、3）観察記録の整理の段階である。この３段階では、表１の様式で以下のようにして、観察が整理されている。

この表１の「４年『理科』の授業記録用フォーマット」を見ると、すでに記録の様式が定まっており、①時間（３分ごと）、②教師の動き、③板書資料、④児童の動き、⑤配線図が発言や行動記録に付加される情報として予定されている。

表１　４年「理科」の授業記録用フォーマット

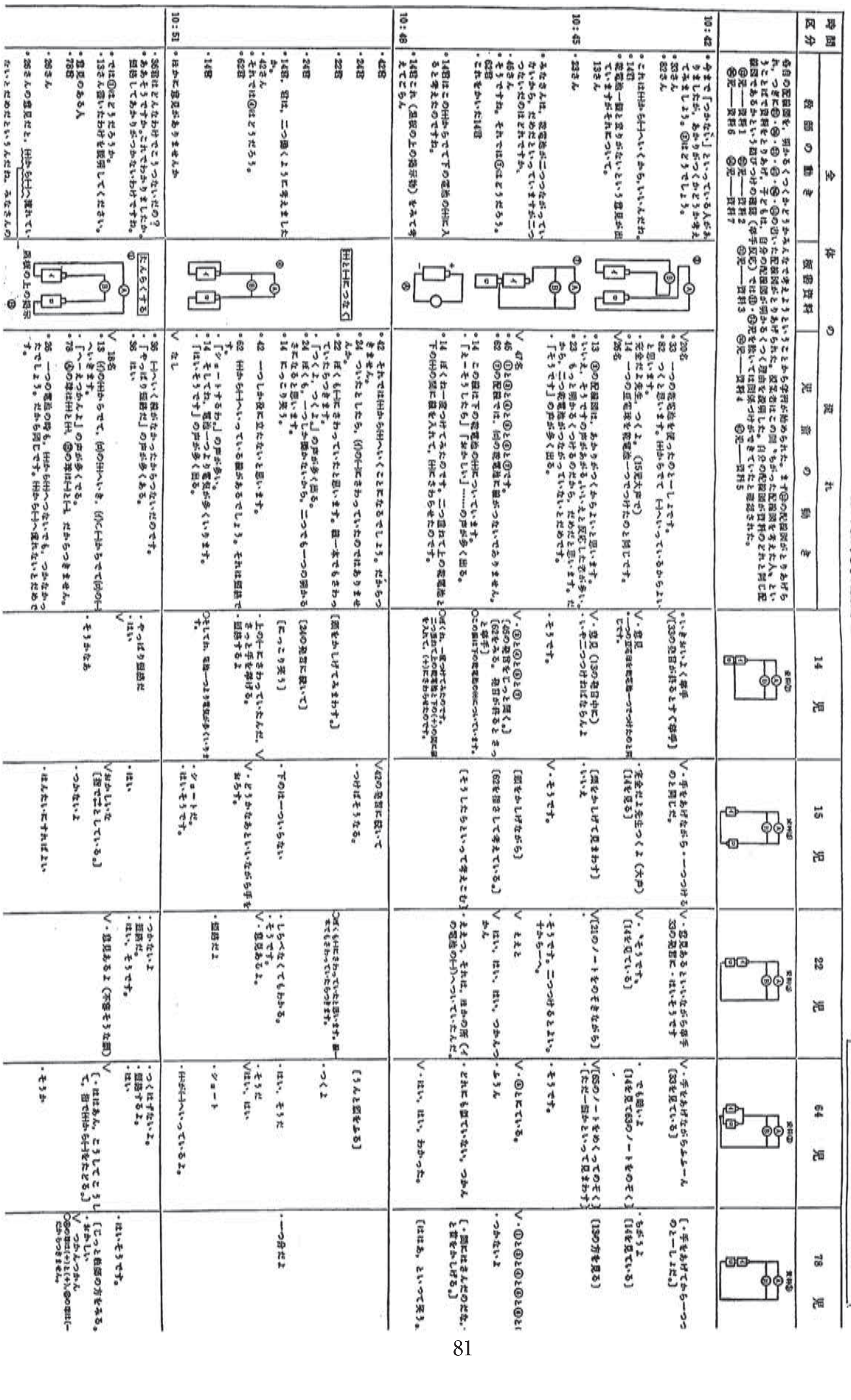
A１				B１						C１		
時間	教師の動き	板書資料	児童の動き	11	12	13	14	15	16	21	22	23
				各児の欄に学習まえの実態をかく（配線図）								
3分												
6分												
9分												

４．堀川小学校の授業研究における授業記録の様式

表２は、第４学年理科「テレビ塔のあかり」の授業記録である。この授業記録は、読者が一覧できるように、折り込みで A3の大きさである。表１のフォーマットと同じ様式である。

まず、注目したいのは、授業記録を作成する様式である。横の軸には「全体の流れ」と６人の児童である。「全体の流れ」は「教師の動き」、「板書」、「児童の動き」にさらに区分されている。縦の軸は「時

表２　第４学年理科「テレビ塔のあかり」の授業記録



間区分」であり、3分ごとに区分されている。表1のフォーマットと同じ様式である。

付加情報として、4つの行動が記号で表されている。指名発言は＜○＞、つぶやき＜・＞、挙手＜Ｖ＞、行動＜レ＞の記号、交渉＜→＞で表記するようにあらかじめ決めてある（富山市立堀川小学校　1962, 22)。実際の授業記録においては、15児の10：42の行動の記録は〔14を見る〕というように、〔　　〕の記号で他の記録と区分して表示されている。そのことが、記録表の最初に掲載されている。

この記録における付加情報としては、①時間、②分節、③教師の動き、④板書、⑤児童の動き、⑥抽出児童（6名)、⑦指名発言、⑧挙手、⑨つぶやき、⑩行動、⑪図（配線図を含む)、⑫交渉がある。

5. 堀川小学校の授業記録作成における付加情報

5-1　観察の分担・役割と観察方法

堀川小学校では、研究授業を観察する方法に工夫がなされている。

第1は、観察の具体的な観点である。表2に示されている授業は、4年理科の電池と配線の組み合わせで明かりの強さを実験で検証している。授業の過程は、①どんなつなぎ方があるかを話し合う「資料提示」、②友達の配線図を見て、明かりがつくかどうかを話し合う「配線図の吟味」、③「実験計画」、④「実験」、⑤「結果の考察」の段階である。その段階ごとに、観点と観察の仕方が計画されている。例えば、②「配線図の吟味」の段階では、「直並列のつなぎ方は、どのような根拠で考えているか」という観点は、「発言記録」などの観察方法が計画されている。

第2は、観察者の作業分担と記録の方法が予め決定されている。具体的には、1）教師の発言や行動を記録するもの（4名)、2）板書資料を記録するもの（1名)、3）指名発言や全体の反応を記録するもの（4名)、4）児童、教師の発言順を記録するもの（1名)、5）個々の児童の反応を記録するもの（21名)、6）録音係（1名)、7）写真係（1名)、8）時計係（1名)、9）学級全体の雰囲気を観察するもの（2名）である。

5-2　観察記録の工夫

観察の際の工夫として、観察者の側からの観察法として「全体観察」、「部会観察」が、児童の側からの観察法として、「全員観察」、「グループ観察」そして、「抽出児童観察」の方法が計画されている（同，29-30)。この観察法は、観察される対象者の数的な特性に対応する観察であるが、作業過程を観察する方法としては、「図解の方法」と「複写紙に写す方法」がとられている。この事例については、図2、図3のようである。

録音での記録は、教室の内でマイクを吊り下げて、2台で全員の声が入るようにしている。体育など行動

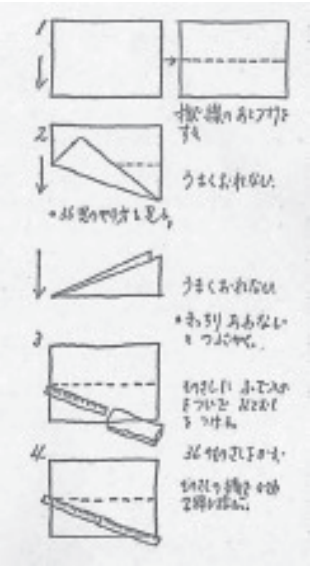


図2　図解の方法

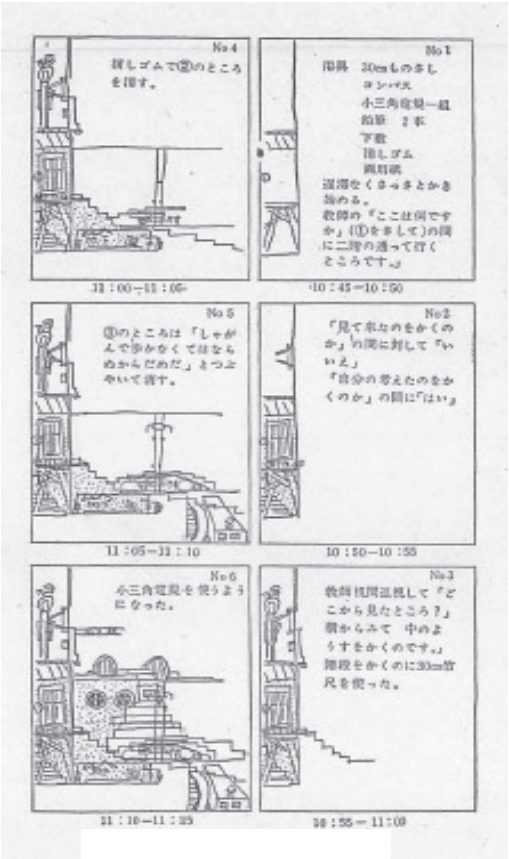


図3　複写の方法

が変化し、範囲が広い場合には、撮影の対象となる抽出児の動きの説明をテープに収め、記録に移す方法をとっている。作業過程や連続した動作を写真で撮る場合には、2、3分おきに撮影し、その過程を記録する方法がとられている。

5-3　４年社会科「郷土の交通」の事例における付加情報

取り上げる事例は４年の社会科である。単元は「郷土の交通」の「新幹線道路は産業道路として重要なはたらきをしている」であり、1957年5月14日に男子31人、女子30名の教室で実施されたものである。図4「工場の地図」と表3「郷土の交通の授業記録」に示されているように、発言は○の記号、行動は●の記号で明示されている。図4に行動の「●ガヤガヤとさわぐ。」と具体例がある。表3では、児童全体の動きの他に２人の抽出児の行動や発言が記録されている。表3の最初の欄に四角で囲われた文書の前に（考え）とあるように、ノートや観察などのノーツから付加された情報がある。図4には主な工場の図が記載されている。授業記録に第三図とあるように、教師が示した資料である。そして教師は「この地図と関係づけて考えてごらん」と発言している。

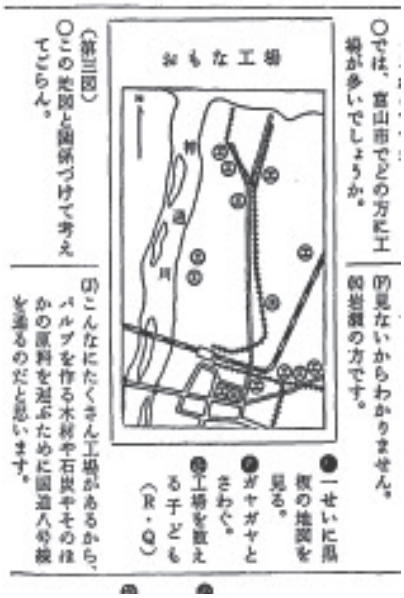


図４　工場の地図

表３　郷土の交通の授業記録

3　交通量の多い原因を究明する段階（記号　○発言　●行動）			
学習活動と教師の動き	児童全体の動き	Y児の動きとその考察	K児の動きとその考察
一　各自の考えを発表させる ○幹線道路は、なぜトラックやオート三輪が多く通るのだと思いますか。 （板書） ①アスファルトだから ②きれいで、にぎやか ③ふもとに家があるから ④広いから ⑤市や町を結んでいるから ⑥物を運ぶから	(イ)幹線道路のふちに家が並んでいるから多く通るのだと思います。 (ロ)いろいろな物を運ばなければならないから多く通るのだと思います。 (ハ)大きな市や町と結んでいるから多く通るのだと思います。 (ニ)（下記） (ホ)（下記）	（考え） アスファルトであり、きれいで、にぎやかだから多く通る。 ○アスファルトでできているから多く通ると思います。それから、きれいでにぎやかだからだと思います。	（考え） 幹線道路は広いからトラックやオート三輪車が多く通る。 ○幹線道路は広いから、トラックやオート三輪車が多く通るのだと思います。

この事例における付加情報は、発言、行動、考え、地図である。発言した児童の氏名は、イニシャルで区分されている。時間の経緯は分など細かい時間は記載されていないが、経過順に記述されている。また板書された記述内容は教師の行動の欄に記述されていている。分節には区分されていないが、「一　各自の考えを発表させる」、「二　②について考える」というように、教師の授業計画と授業過程が同一であるということが前提にあるかもしれないが、教師の計画に即して区分されている。

挙手は●の記号で示されているが、「●挙手40名」というように人数が記載されている場合もある。個別の行動は●の記号で示されているが、全員の行動は、「（全）K君をみる。」とうように児童全体の動きの欄に記述されている。

5-4　理科と音楽の事例における付加情報

次に、理科と音楽の事例をとりあげたい。

表4は、4年理科「火と空気」（1958年2月5日実施：児童62名）の学習記録である。この授業にいたるまでに、「風口をしめると火勢が弱るにはなぜだろう」という問題と「こんろを密閉すると、火は

どうなるのだろう」という予想と実験をしている。記載されている記録は「風が入らぬようにした時、火が消えたわけを話し合う」段階の授業である。この記録には、付加情報として、次のことがある。様式としては学習活動と指導の意図の欄がある。教師発言と比べ、児童の発言は、1文字インデントがとってあり、区分されている。発言者は、Tが教師、ABCなどで児童、番を○で囲った記号で板書、Vで挙手、＜・＞でつぶやきがあらかじめ決めてある。この事例で＜・＞の「つぶやき」が登場している。挙手はVの記号で示されているが、「V（13名）」というように人数が記載されている。こんろの各部の名称が記載された断面図が授業記録に載っている。指導の意図の欄に、こんろの様子の写真が付加されている。

表5は、4年音楽「夕やけ」の授業記録の事例である。様式としては、学習の流れを横軸にして、縦の区分は、①教師の指導助言、②児童全体の動き、③抽出児A、④抽出児B、⑤抽出児Cになっている。付加情報としては、発言は小さい＜ 。＞の記号が、行動やつぶやきは小さい＜・＞が記述の先頭に付けられている。挙手は、「・14名挙手」と記述されている。

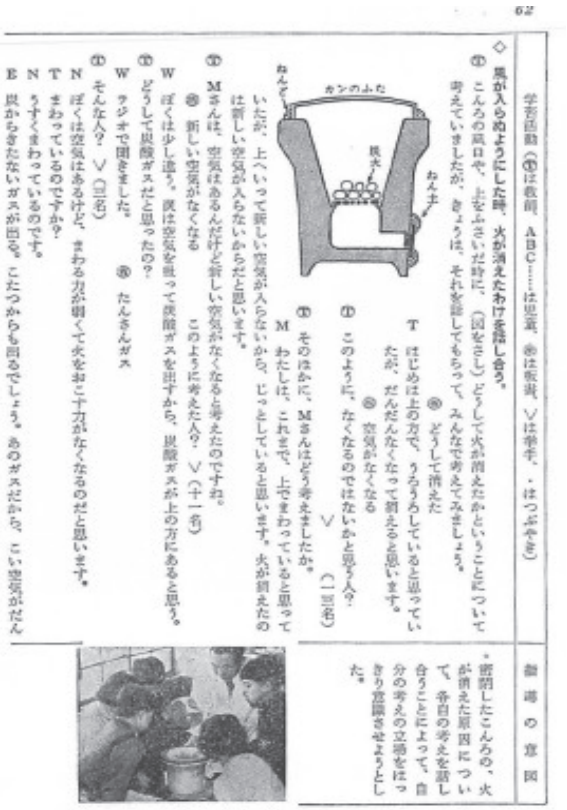
児童の氏名は、例えば、＜・D女子「5回ほど。＞というようにイニシャルと男子と女子の性別が記述されている。音楽の授業での歌や歌唱の記録は、表5の抽出児BとCの欄のあるように、五線譜の上に音符で示されている。

教師の発言は「　」書きで示され、行動は（　　）で示されている。この記録には発言番号は付加されていない。

5-5　体育の事例における付加情報

動きのある体育の事例を見ると、グループ活動の事例が分析されている。ポートボールの授業（5年「体育」1958年12月4日）は、第1次「ポートボールの仕方を話あい、全体計画をする」、第2次「ポートボールをしてみる」、第3次「練習をする」、第4次「学級内の試合をする」で計画されている。Bグループの「ボー

表4　理科の授業記録



62

学習活動（⑪は教師、ABC……は児童、⑧は板書、Vは挙手、・はつぶやき）	指導の意図
◇ 風が入らぬようにした時、火が消えたわけを話し合う。 ⑪ こんろの口や、上をふさいだ時に、（図をさし）どうして火が消えたかということについて考えていましたが、きょうは、それを話してもらって、みんなで考えてみましょう。 ⑧ どうして消えた T はじめは上の方で、うろうろしていると思っていたが、だんだんなくなって消えると思います。 ⑧ 空気がなくなる ⑪ このように、なくなるのではないかと思う人？ V（一三名） ⑪ そのほかに、Mさんはどう考えましたか。 M わたしは、これまで、上でまわっていると思っていたが、上へいって新しい空気が入らないから、じっとしていると思います。火が消えたのは新しい空気が入らないからだと思います。 ⑪ Mさんは、空気はあるんだけど新しい空気がなくなると考えたのですね。 ⑧ 新しい空気がなくなる　このように考えた人？ V（十一名） W ぼくは少し違う。炭は空気を吸って炭酸ガスを出すから、炭酸ガスが上の方にあると思う。 ⑪ どうして炭酸ガスだと思ったの？ W ラジオで聞きました。 ⑧ たんさんガス ⑪ そんな人？ V（三名） N ぼくは空気はあるけど、まわる力が弱くて火をおこす力がなくなるのだと思います。 T まわっているのですか？ N うすくまわっているのです。 E 炭からきたないガスが出る。こたつからも出るでしょう。あのガスだから、こい空気がだん	・断定したこんろの、火が消えた原因について、各自の考えを話し合うことによって、自分の考えの立場をはっきり意識させようとした。

表5　音楽の授業記録

学習の流れ	教師の指導助言	児童全体の動き	抽出児A	抽出児B	抽出児C
導入	・「それでは、いよいよこの部分に低いふしをつけてみましょう。どのように進めていったらよいでしょうか。」（と三段目の楽譜を指さし、出体的に学習にとりくむ場を児童の中から求めた。）	・全児「先生、一部のふしを教ってください。」 ・D女児「五線ほど。」			
展開	・「先生が歌ってあげましょう。歌本でも、音でも、ことばでもどちらでも好きなのでつくりましょう。はじめてもいいですか。」（教師は、児童の中央に立って、五回ロずさむ。）	・全児「はい。」 ・あちこちでロずさむ。	・はじめてもよいかと聞いて「はい」と力強く返事をする。 ・三回目からことばで歌っているが首肯なっていない。	・低旋律をつける部分の主旋律を歌詞で歌っている。	
展開				・三回目からことばでつぶやいているが声が小さくてきき とれぬ。 ・五回目のつぶやき	
展開					・五回目にことばでつぶやくように小さくロずさんだ。

ルをとらないようにするための方法を話しあう」の授業での発言と活動や行動の記録は表６のようである。ここでの付加情報は、写真である。（写真一）が示してあり、その次にＹ児、Ａ児、Ｆ児、Ｋ児の発言が記録されてる。Ｙ児「まだ他にありませんか」に続く、Ａ児、Ｙ児、Ａ児の発言の記録の後に、＜Ａ児は話しながら実際にやってみる。＞と行動の記録があり、その後に（写真二）が示してある。

連続した選手の動きは、図５「体育の事例」に事例があるように、図と発言と写真が示してある。

6. 堀川小学校の授業記録作成における特色

付加情報の範囲と程度の視点から、これまでの事例分析の結果を整理すると、次のことがいえる。

第１に、授業逐語記録を作成する様式が、分節と経過時間を縦軸、教師と児童の活動（発言を含む）を横軸として構成されている。理科の事例の場合、記録の様式が定まっており、①時間（3分ごと）、②教師の動き、③板書資料、④児童の動き、⑤配線図が発言や行動記録に付加される情報として予定されている。

第２に、教師発言と児童発言の区分をインデントで示すことで視覚的な配置がなされている。

第３に、授業の経過した時間が付加情報として、記述されているが、５分、３分、１分と異なる。理科の実験や児童の反応値を確定するためと思われるが、１分と細かくなっている。

第４に、発話者は、同定できるように、氏名、イニシャル、男女別、番号などで示されている。

第５に、発言の順番、すなわち、発言番号は、教師別、児童別ではなく、通し番号で連続して付されている。

第６に、挙手、活動、沈黙、雰囲気など行動や表情などの記述が付加されている。

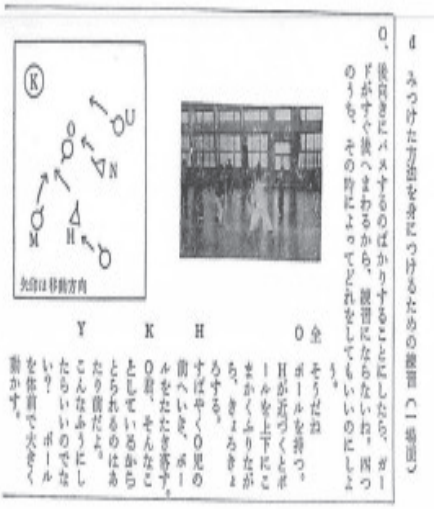


図５　体育の事例

表６　体育の授業記録

c　ボールをとられないようにするための方法を話しあう（Bグループ）

Y　（リーダー）　相手にとられないようにするために、どんなやり方がよかったですか。

O　ガードがボールを持っている者にひとりつき、他のガードもそのまわりにきた時、すきをみて後の近くへ来た味方に渡すのがよかったよ。（同意者　二）

（みんなは、だまってO児の方をみている）

Y　O君、やって説明してくれよ。

（写　真　一）

O児は、ガードとパスをする味方ひとりを立たせ、実際にやってみる。（写真　一）

Y　まだ他にありませんか。

A　相手がガードしにくいボールで味方が受けやすいボールを投げたらいいです。

Y　どんなふうに？

A　たとえばね、相手が手をあげた時、わきの下からスーッと前の方へ投げるの。（同意者　四）

A児は話しながら実際にやってみせる。（写真二）

F　ボールを右へやるようにして、左の方へパスをするのも、よかったわ。（同意者　四）

K　O君とH君は、すぐ前にいるのに、やったりとったりしている。あんな時、だれがどこにいるかよくみて、なるべくゴールの近くの人に、パスをするようにしたらよいのではないですか。

C　そうです。

O　ぼくはね、たいていガードは前にいるから、後を向いてパスをするのがよかった。ガードしている相手をごまかすようにして、パスをするといいよ。（同意者　一）

（実際にやってみる）

（写真　三）

（写　真　二）

（写　真　三）

第７に、教授活動の教材に関わる事物や児童の作成した作品などが図で示されている。

第８に、実験の様子など写真の静止画像が付加されている。

第９に、体育の授業のように試合や練習での動きが写真と図解と発言で示されている。

第10に、授業がグループでなされた実験の場合には、実験グループが特定できるように、グループの番号と氏名を同定できる番号で示されている。

授業記録を作成する場合、堀川小学校の事例をみると、記録で用いる記号はあらかじめ決めてある。例えば、挙手は＜Ｖ＞で示す等、表記が単純で可視化されている。授業記録における付加情報は、堀川小学校の場合、意識された観察方法と関連している。整理したような付加情報が授業記録に記述されているのは、堀川小学校においては、研究授業を観察する方法に工夫がなされていることがある。第１は、観察の具体的な観点が予め事前に話し合いで定めてあることにある。第２は、観察者の作業分担と記録の方法が予め決定されていることである。第３には、児童の側からの観察法として、「全員観察」、「グループ観察」そして、「抽出児童観察」の方法が計画されていることにある。その意味で、観察方法と付加情報の関連をさらに具体的に事例分析する必要がある。

堀川小学校の授業記録作成の様式をみると、分節や抽出児などの設定は重松鷹泰の考えを反映していると思われる。分節をどのように意味づけたのか、重松鷹泰の考えと堀川小学校の考えを比較検討する必要がある。同じく、抽出児の考えもそうである。特に抽出児のアイデアはどのような考えにもとづくのか、その考えと上田薫の考えとはどのように関連するのかなど、解明すべき問題がある。付加情報の問題は、表面的には、文字記録作成における音声データの他に付加された情報であるので、視覚化されている。その視覚化された情報の背後にある分析あるいは解釈者の意図、思想を問うという問題が残されている。

参考文献

柴田好章、石原正敬（2020）「名古屋大学教育方法研究室における「授業分析」と「R.R. 方式」の教育評価論としての意義の再検討」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要　教育科学』66（2），pp. 139-155.

重松鷹泰（1961）『授業分析の方法』明治図書.

重松鷹泰、上田薫、八田昭平（1963）『授業分析の理論と実際』黎明書房.

田村恵美（2012）「教室における子どもと教師の関係性についての一考察：重松鷹泰の教育論とその実践のあり方」『上智教育学研究』26，pp. 61-81.

溜池善裕（2014）「社会科教育における重松鷹泰の授業分析研究の意義：「子どもがする授業」の発見と追究に着目して」『社会科教育研究』121，pp. 28-39.

高橋純一、坂井誠亮（2020）「富山市立堀川小学校における授業研究の形成過程に関する研究：充実期と発展期に焦点を当てて」『北海道教育大学紀要．教育科学編 』70（2），121-132

蜂須賀渉（2009）「木下竹次･重松鷹泰の『学習法』の授業事例研究 --「発表者の『たぶん･でも』を聞いて、自分の『たぶん・でも・きっと』を見つける』（奈良女子大学附属小学校 小幡肇氏）の授業事例を通して」『愛知教育大学研究報告 教育科学編』58，1，pp. 71-177.

富山市立堀川小学校（1959）『授業の研究』明治図書.

富山市立堀川小学校（1962）『授業の改造』明治図書.

的場正美（2002）「授業分析」安彦忠彦，新井郁男，飯長喜一郎，井口磯夫，木原孝博，小島邦宏，堀口秀嗣　編集（2002）『新版　現代学校教育大事典』ぎょうせい，pp. 557-558.

的場正美（2013a）「授業分析の方法と課題」的場正美，柴田好章『授業研究と授業の創造』渓水社，

pp. 5-20.
的場正美（2013b）「授業研究の起源と歴史」的場正美，柴田好章『授業研究と授業の創造』渓水社，pp. 279-293.
的場正美（2017）「授業研究と授業分析の課題：実践と理論へのその貢献」『東海学園大学教育研究紀要』2（1），pp. 159-172.